

「読む600」の授業で教師が目指すもの

—教材を中心に—

高橋 純子

要 旨

本稿では、2011年2、3学期、および2012年1、2学期にわたり「J641 読む」の授業で使用した読解教材に対する学習者の理解を中心に考察する。学習者が教材をどのように理解しているのか、どのようなスキーマを持って読み進んでいるのか、背景知識が読みの深さに与える影響などを考察する。

授業全体を通して、読み物に取り組む前に、これから読む教材に関しての興味、関心を引き出す活動、いわゆるスキーマの活性化を行い、トップダウン式読解指導を行った。また、学習者のメタ認知活動を促進するため小グループによる相互教授を行った。
【キーワード】 スキーマ 背景知識 トップダウン式読解 メタ認知活動 相互教授

Criteria for Evaluation in an Intermediate Reading Class : focused on reading materials

TAKAHASHI Junko

[Abstract] The learners' comprehension of the reading materials used for the second and third terms in 2011 and the first and second terms in 2012 is examined. How deeply the learners understand the texts, what sort of schema they have, and how the learners are affected by background knowledge are discussed.

In order to motivate the learners to study the reading materials, the teacher tried to activate their schemata, and introduced top-down reading methods. Reciprocal teaching among the learners was used to encourage the learners' metacognitive activities.
【Keywords】 schema, background knowledge, top-down reading methods, metacognitive activities, reciprocal teaching

1. はじめに

読む、書く、話す、聞くの四技能を使い、読み物の背景知識となる情報収集活動を取り入れた授業について報告したが(高橋2012)、本稿では、教材となる読み物に関する学習者の背景知識および関連情報収集活動が読解にどのように影響を与えているか、学習者が適切なスキーマを持って教材に取り組んでいるのか、そして、読み物の特徴に合わせた読み方の指導について、使用した読み教材から具体的例をあげ、記述していく。

「J641 読む」のクラスは2011年度より3クラス同時開講で2名の教師が担当したが、2011年度2学期、3学期、2012年度1学期、2学期に使用した教材に基づき、筆者担当の2クラスについて報告する。2011年度1学期に使用した教材は、試行の末、その後いくつか差し替えたため、この学期の資料は本報告では扱わない。

2. 教材

以下の読み教材を使用した。

- 1) 説明文：「血液型による性格判断」(『日本語中級読解』アルク)
- 2) 物語風エッセイ：「トットちゃん」(『中級からの日本語 読解中心』新典社から)
- 3) 歴史説明文：「ラナルド・マクドナルドと森山栄之助」(『日本を知ろう』三浦昭・ワット・伊東泰子著 アルクから)
- 4) 小説の抜粋：『海の祭礼』吉村昭著からの抜粋(『日本を知ろう』三浦昭・ワット・伊東泰子著 アルクから)

3. 受講生

本授業は、中級前半レベルの日本語学習者を対象とする。学習者は筑波大学留学生センターの日本語補講コースの各レベル(100~500)を経て進級してきた者、自国などで日本語を学びプレースメントテストによってこのレベルに配置された学生が混在する。

学習者の日本語での読書経験は、教科書に出てきた読みの教材や授業で配布された読み教材は読んだことがあるが、授業以外では自発的に読んだ経験のない者や、日本の文学作品の翻訳物や漫画、アニメなどで日本の出版物などに親しんでいる者など幅が広い。学習者の読書経験を尋ねると若者が登場人物のライトノベルというジャンルが気軽に読めるものとして人気が高いようである。日本の文化社会に関する関心、背景知識が豊富な学習者ほど教材、授業への取り組みも積極的で、親和度が高いようである。一方、専門の勉強、研究に集中し、人文関係の書物はあまり読まないという学習者もいる。いずれにしても、多様な背景を持つこのレベルの学習者が求めるのは、読む力のみではなく、「話す」「書く」「聞く」も含めた日本語力全般の向上を目指していることが窺える。各学期の受講生の内訳は次の通りである。

1. 各学期の受講生数と国籍

2011年度- 2 学期	25名 (出席不良による不合格者 3 名を含む)	中国15名、韓国 3 名、ベトナム 2 名、ベラルーシ 1 名、エジプト 1 名、ネパール 1 名、スロベニア 1 名、オーストラリア 1 名
2011年度- 3 学期	32名 (期末試験未受験による不合格者 1 名を含む)	中国17名、台湾 2 名、韓国 1 名、エジプト 1 名、キルギス 2 名、カザフスタン 1 名、ウクライナ 2 名、モーリタニア 1 名、メキシコ 1 名、ラオス 1 名、インドネシア 1 名、ドイツ 1 名、ウズベキスタン 1 名
2012年度- 1 学期	23名 (出席不良による不合格者 2 名を含む)	中国14名、ロシア 2 名、ウクライナ 1 名、カザフスタン 1 名、ウズベキスタン 1 名、韓国 1 名、シリア 1 名、イギリス 1 名、ブラジル 1 名
2012年度- 2 学期	36名 (期末試験未受験による不合格 7 名、成績不良による不合格者 2 名を含む)	中国14名、台湾 4 名、カザフスタン 3 名、ウズベキスタン 3 名、キルギス 1 名、カンボジア 1 名、タジキスタン 1 名、ロシア 2 名、ラトビア 1 名、リトアニア 1 名、ドイツ 1 名、ポーランド 3 名、スペイン 1 名

4. 読みの指導

授業全般を通して以下のような読みの指導を行った。

- 1) スキーマの活性化：読み物に取り組む前に、これから読む教材に関する興味、関心を引き出す活動、いわゆるスキーマの活性化を行った。スキーマには大きく分類して内容スキーマ (content schema) と形式スキーマ (formal schema) があるが、ここでは、内容スキーマの活性化を図るため、学習者に背景知識、関連情報を調べてくるという課題を与えた。
- 2) トップダウン式読解指導：一つの教材（「血液型による性格判断」）を除き、まず最後まで読み進み、読み物をできるだけ全体的に理解するよう促した。読み物全体を見て、どんなジャンルの読み物か、作者はどんな人物か、どのような読み手を想定して書かれたものか、など推測しながら読むことが必要だからだ。
- 3) メタ認知活動の促進：何がわかって、何がわからなかったのか、どのくらい理解できたのか、理解できなかったのはなぜだろうか、どこがわかれば理解が進むのか、学習者が自分自身の読みをモニターするよう指示した。
- 4) 相互教授 (reciprocal teaching)：学習者のメタ認知活動を促進するため、小グループでの話し合いを行った。読み物の内容理解ワークシートを作成し、それに答えながら不明な点を説明しあう、テキスト内容を予測する、などの相互教授を行った。

5. 背景知識1 (読み教材「ラナルド・マクドナルドと森山栄之助」、吉村昭著、小説『海の祭礼』の抜粋の場合)

「ラナルド・マクドナルドと森山栄之助」と吉村昭著『海の祭礼』という小説の抜粋は両者が相補う形で使用されるものである。「ラナルド・マクドナルドと森山栄之助」はラナルド・マクドナルドの簡単な生い立ちと彼が日本に憧れ、苦勞の末、来日を果たし、オランダ語の通詞たちに英語を教えることになった経緯とオランダ語の通事森山栄之助の活躍を、その当時の日本の政治外交状況を背景に描いた歴史説明文である。一方、小説『海の祭礼』の抜粋は、鎖国中の江戸末期、欧米との接触が始まった頃、上述の森山栄之助を始めとするオランダ語通詞たちにアメリカから捕鯨船に乗ってやってきたアメリカ人ラナルド・マクドナルドが英語を教える一場面で、マクドナルドと通詞たちとの語学学習を通しての熱いやりとりが描写されている。

この2つの読み物を読むにあたって、日本の鎖国、鎖国当時の貿易相手国、そして開国を迫る欧米の国々、など学習者に背景知識を与える必要がある。それをまず学習者に調べさせることから始めた。教室では教師が学習者の調べてきたことを補いながら、あるいは学習者に質問しながら説明し、学習者の知識を確認していった。当時の貿易相手国はオランダで、オランダ人たちは長崎出島に住まわされていたこと、それでオランダ語の通詞はいたが、英語は勉強していなかったこと、同じアルファベットを使用しても言語によって発音が異なること、学習者の母語と他の言語とを比較させたりして、同じアルファベットの綴りでもオランダ語と英語では、読み方、つまり発音が異なることなどを示し、読み物に直接関係する情報を確認した。詳細な情報を集めてきた学習者もあり、なぜ鎖国をすることになったのか、どうしてオランダとだけ貿易をしたのか、韓国、中国とは貿易をしていたのか、中国も鎖国をしていた時期がある、など情報交換は多岐に渡った。

6. 背景知識と読みの深さとの関係

以下は、小説『海の祭礼』の抜粋からの文章である。

森山は、自分の髪をつまみ、

「ワット？なに？」

とたずねた。

マクドナルドは紙にHairと書き、森山は、それを通詞たちにかざしてみせたが、マクドナルドの口からもれた発音に、ふたたび顔色を変えた。かれが信じていた発音はヘールであるのに、マクドナルドの口からは、ヘアーという言葉がもれている。かれは、自分の体が地の底に沈んでいくような絶望感にとらわれた。

期末テストにおいて「地の底に沈んでいくような絶望感にとらわれたとありますが、それは、なぜですか」という問いを設けた。それまでの授業で取り上げた内容理解質問で既に意見交換をしたものである。

その結果、2011年2学期では、

「(森山たちが) 今まで習ってきたオランダ語の読み方ではhairは「ヘール」だが、英語では「ヘア」になる。このようにオランダ語と英語では同じアルファベットでも読み方、発音が違うことが何度もあり、英語習得が大変だと感じ、絶望したのだ」ということが書いてある正解が、22名中4名、「自分が信じていた発音はヘールであるのにマクドナルドの発音はヘアであるから」とオランダ語と英語の比較をせず、文中の引用で解答したものが12名、「今まで習ってきた英語がマクドナルドの発音と違ってびっくりした」という解答が5名、「発音を間違っていて恥ずかしかったから」というものが1名であった。以下、A:「今まで習ってきたオランダ語の読み方では「ヘール」だが、英語では「ヘア」になる。このようにオランダ語と英語では発音が異なることが何度もあって、びっくりしたのだ」 B:「自分が信じていた発音はヘールであるのにマクドナルドの発音はヘアであるから」 C: その他 とする。

2011年3学期では、28名中、Aが7名(1名、オランダ語とフランス語を混同していた) Bが14名、Cとして「自分の知っている英語の発音と異なる」「オランダ人から教えてもらった英語の発音と異なる」「日本語の発音と似ている」という答が7名あった。

2012年1学期では、21名中、Aが16名、Bが0名、Cとして「英語と日本語を比べている答」、「(英語の)発音ができないから」、「間違えて恥ずかしいから」、「前に習った英語の発音が正しくなかった」という答がそれぞれ1名ずつ、答として書かれた日本語の文が意味不明のため不正解としたものが1名であった。

2012年2学期では、29名中、Aが5名、Bが20名、Cが4名であった。Cの答えとしては日本語の発音が英語の発音に影響を与えているという答えが見られた。Hairを日本語で発音していて、rを「ル」と読んでしまう、という解釈であった。

単純に正解の数だけを比較してみると、2011年2学期4/22名、2011年3学期7/28名、2012年1学期16/21名、2012年2学期4/29名である。

7. 背景知識2(読み教材「ラナルド・マクドナルドと森山栄之助」、小説『海の祭礼』の抜粋の場合)

もう一点、背景知識として押さえておかなければならないものがある。それは、当時の奴隷貿易と奴隷船についてである。授業時間配分などの理由から、奴隷船に関しては情報収集を指示せず、授業時に知識・情報交換、確認をした。学習者に奴隷船で奴隷はどのような仕事をするのかと尋ねると料理を作る、掃除をする、などの答が返ってきた。教師が以前、奴隷貿易を扱った映画やアフリカ系アメリカ人が自分のルーツを探るアメリカのテレビドラマなどで見た奴隷船の映像を話してきかせた。2011年3学期には、奴隷貿易を描写した映画を見ていた学習者もいて奴隷船に関する情報を分かち合うことができた。

以下は「ロナルド・マクドナルドと森山栄之助」の一節である。

ロナルド・マクドナルドは、17歳の時に船員となり、ニューヨークからロンドンへ行き、雇われてサンフランシスコへ行ったが、そこで乗り組んだ船は奴隷船であった。彼は幻滅して、次は捕鯨船に乗り組むことにした。

期末テストにおいて「ロナルド・マクドナルドはなぜ幻滅したのですか」という問いを設けたところ、以下のような解答を得た。解答の表現は異なるが、その内容を以下のように分類した。2011年2学期では、A:「奴隷船の悲惨さ、奴隷に対する非人道的扱いをあげた解答」が12/22名、B:「奴隷船の航路では日本には来ることができないからという解答」が0名、C:「奴隷船の悲惨さと航路の両方をあげた解答」2名、その他の解答としてD:「乗り込んだ船が奴隷船だったから」が4名、その他「奴隷船で働かされすぎたから」が2名、「奴隷船には人が多かったから」「奴隷船に乗るのは他の人はあまりよくないと思うかもしれないから」がそれぞれ1名ずつであった。2011年3学期では、Aが13/28名、Bが5名、Cが7名で、そのうち航路優先が4名であった。Dが3名であった。2012年1学期では、Aが10/21名、Bが5名、Cが2名、Dが4名であった。2012年2学期では、Aが17/29名、Bが6名、Cが2名、Dが2名、その他が2名。それぞれ「彼はじやう(自由)をさがしていたから、どれいせんを見て、りょこうのかのうせいがあったから」「奴隷船にはいろいろな制限があるので、幻滅したと思う」「船員として働いているから自分の自由がない」という記述があった。

答AとCはどちらも非人道的な扱いをあげている。AとCの合計を見てみると、2011年2学期では19/22名、2011年3学期では20/28名、2012年1学期では12/21名、2012年2学期19/29名であった。さらに「乗り込んだ船が奴隷船だったから」は解答としては説明不足であるが、奴隷船で人が非人道的な扱いをされていることを前提として答えていると考え、これも合わせると2011年2学期、「奴隷船の悲惨さ、奴隷に対する非人道的扱い」という答が18/22名、2011年3学期は23/28名、2012年1学期は16/21名、2012年2学期は21/29名になる。

上述の期末テストの2つの質問は、両者とも授業内に教師が質問をし、小グループで話し合い、さらにクラス全体で取り上げたものであるが、残念ながらテストで正解できない学習者がいる。その原因としては、その質問をした時に授業を欠席していた、グループでの活動及び授業に集中していなかった、聞く力が弱く、正確に理解していなかった、自分で独自に考えた、答を書いたが文章力が足らず教師が理解できなかった、などが考えられる。新たに得た背景知識と目前のテキスト情報を関連づけられないとは考えにくい。

学習者の解答の文章にインド人とインディアン(ネイティブアメリカン)の混同、アフリカ人とインディアン(ネイティブアメリカン)の混同が見られた。授業時、インディアンという言葉が出てくるが、これはアメリカの原住民、ネイティブアメリカンを指すので

あって、インドのインド人と間違えないようにという注意を授業時にしたのであるが、このような間違いが見られた。

8. 「血液型による性格判断」の関連情報収集活動とボトムアップ式読み方指導

スキーマの活性化を図るため、周りの人の血液型を聞いてくる、血液型についてどんなことを知っているか日本人学生に聞いてくる、有名人の血液型がわかれば調べてくる、という課題を与えた。学習者の中にも血液型に関して、日本人の間で話題になるようなことを知っている学習者も数人いたが、学習者のほとんどは今まで関心をはらっていなかったようだ。この活動で、日本人がそれぞれの血液型の人に対して抱いている大雑把な性格特徴がつかめることを意図した。

この教材は、新出語彙・慣用表現が多く、トップダウン式の読みを実現するには不適切なものであった。単語、表現など小さな言語単位の意味を積み上げ、さらに大きな言語単位へと段階的に処理を進める「個から全体」というボトムアップの読み方が適している読み物と言える。日本人にインタビューして聞いてきた各血液型のおおよその性格特徴と一致するか、を読み比べられることを期待した。

学習者のメタ認知活動という視点では、知らない単語、表現が多いため、読みが困難であった、と考えている学習者が多かった。しかし、学期末の教材についてのアンケートでは、新たなことを学び、役に立ったという回答が多かった。学習者は、読みを通して、語彙・表現の拡充を求めているようである。

9. 「トットちゃん」のトップダウン式読みの指導と学習者のスキーマ

他の3つの読み物に比べると読みやすい教材である。始めから、終わりまで分かりにくいところは印をつけながら最後まで読み進むようトップダウンの読みの指導をした。その後、内容質問のワークシート（2012年2学期に使用 資料1参照）に答えさせた。

その結果、トットちゃんが男の子だと考える学習者が37人中18名、女の子だと考える学習者が19名であった。

男の子だとする学習者は、以下のような理由をあげていた。

- ・男の子はふつう見つけたものを友人に見せる気がある（ママ）
- ・棒で穴を掘るのは男の子らしいです。
- ・動作で判断しました。両足をふんばって、しげみにとびこんだとか。
- ・女の子がこんなことあまりしない。
- ・たぶん女の子は、お金を拾ったあと、すぐ交番へ出し、自分で隠すことしません。
- ・スナックを買う考え、宝物を埋まること、男の子らしい。（ママ）
- ・一人で電車に乗っていたから。私の国では女の子が一人で電車に乗ることはないです。

- ・男の子の雰囲気を感じた。
- 一方、女の子だとする理由として以下のことがあげられていた。
- ・「ちゃん」をつけるのは女の子だ。(9名) トット君じゃない。
 - ・自分のことを「私(わたくし)」と言っている。男の子だったら「僕」
 - ・男の子はそんな細かいことにこだわらないからです。
 - ・五銭で何が買えるか、甘いものくらべるから女の子。
 - ・考えが女っぽい。心配しすぎる。
 - ・五銭玉を見ていろいろな考えや推理をした。私は男だし、こういう状況にぜんぜん詳しくに考えなかった。(ママ)
 - ・著者を知っている。

その後、著者黒柳徹子に関して情報収集するという課題を与えたため、著者の自伝的作品であるので女の子であると判明するのだが、学習者同士の話し合いでは、それぞれの社会文化的背景などを交換しあい、推測していたようだ。

「トットちゃん」の時代背景について質問したところ、「戦争の前」が12名、「戦争の後すぐ」が10名、「30年くらい前」が11名で、「20年くらい前」「10年くらい前」と答えた者がそれぞれ1名ずついた。子どもの心理描写をたどることがこの教材の主な目的であるので、時代背景は大きな影響を与えない。どの時代でも通用する普遍的な子どもの心の葛藤を描いているのだが、学習者の世代に日本の姿がどのように見えているのか垣間見られる。

<戦争の前>

- ・チョコがあるので100年以内だと思います。
- ・五銭というお金は小さいキャラメルが一箱か、チョコが一枚買えるくらいの金額ですから。
- ・お金が違うから、そんな気がする。
- ・五銭玉は大金、社会は平和。

<戦争のすぐ後>

- ・電車があたり、子どもも学校へ行ったりします。
- ・現代の子どもより考えが簡単。
- ・キャラメル、チョコの値段、電車もある。
- ・銭が使われていたから。五銭玉は現在のお金ではないから。
- ・たぶん1945年前、日本には交番がありませんでした。あった場合も、たぶん他の名前がありました。

<30年くらい前>

- ・チョコなど買えるし、電車の運行も回復し、それは戦争のすぐ後ではなく、経済も良く

なる時と思います。

- ・戦争の前か後は貧しかったから、その話はもうちょっと新しいと思います。
- ・戦争の後は生活用品が足りないんですが、他のものを買うのは余裕がないと思います。
- ・五銭玉というのは現在のお金ではありません。
- ・五銭でキャラメルと板チョコが買える。

<20年くらい前>

- ・電車がある。

<10年くらい前>

- ・今と同じ。

10. 教師が学習者に求める理解

Francoise Grellet (1981) が「自立した優れた読み手を育てるためには、読み物にどう取り組み、どう解釈するのかを教える必要がある。読み物の意味するものは一つに決まっているわけではなく、読み手それぞれその過去の経験や読み物から何をしようとしているかによって決定されるものだ。それゆえ読解力をテストすることは難しく、教師が自分の解釈を学習者に押し付けてしまう誘惑も大きい」と書いているが、筆者もそのことに注意深くありたいと考える。学習者の自由な解釈、発想を大切にしたいと考えている。正解は一つだけではない場合が多々ある。

しかし、どうしてもここだけは正しく理解してもらいたいところ、させなければならないところがある。それが、6及び7で取り上げた「ラナルド・マクドナルドと森山栄之助」、小説『海の祭礼』の抜粋での質問である。オランダ語通詞として長年活躍してきた語学の天才たちがオランダ語と同じようにアルファベットで表記する英語を学ぼうとすると何度も表記と発音の問題で躓く、そのいら立ちや悔しさを読みとってもらいたいと考える。「習った英語がマクドナルドの発音と違うので絶望した」と読んでその困難さや悔しさは感じ取れるかもしれない。しかし、文章を読めばオランダ語と英語の微妙な読み方の違いを述べているのは確かなのだ。

教材の本文では「そこで乗り組んだ船は奴隸船であった。彼は幻滅して、次は捕鯨船に乗り組むことにした」としか書いてなく、「奴隸船」がいかに悲惨な状況をだったのかは描写がない。奴隸船から捕鯨船に乗り変えただけで、その理由が幻滅なのだ。学習者としては、奴隸船が日本には来ないからだろうと一生懸命考えを巡らせたのだろうが、これではラナルド・マクドナルドという人物を理解できていないことになる。ここはどうしても奴隸船がどんなものであったのか、学習者に情報収集をさせるべきだったと反省している。映像こそないが、インターネットではその悲惨な状況が描写された記事がいくつか掲載されている。教師の説明だけではなく、自分で情報を集めて知ることのほうがインパクトが

強いだろう。

2012年2学期の授業では、当時の奴隷貿易及び奴隷船に関して情報を集めるよう指示をした。その結果、奴隷船の悲惨さをあげて解答した学習者が多かったようだ。しかし、学習者の解答文を見ると、表現力の貧弱さゆえうまく伝えられないことも察せられる。書きたくても表現できないため、簡単な答えで済まそうとしているところも見られる。「奴隷船の不人間的な事件を見たから」「奴隷船の生活は人類の生活らしくない」「自由ではない人が多かった」など、学習者が何を言いたいか推察はできるが、解答の文章としては表現指導の必要を感じる。

一方、読み物「トットちゃん」に関しては、その限りではない。トットちゃんが男の子であっても、時代背景があいまいであっても読み物の真髓を読み違えることはないと考えられる。日本語学習として、女の子は「ちゃん」で、男の子は「君」を使うという理由は、正さなければいけないが、学習者がトットちゃんを男の子、女の子と判断した理由は、その後の深い読みにも導くことができるだろう。つまり、著者黒柳徹子に関する情報を集め、著者について多少なりとも知ることで、著者の今までの活躍、人となり、男の子のように見える幼少時の振る舞いと結びつけることができるかもしれない。

11. 相互教授

2012年1学期の学期末アンケートで「小グループでの話し合いはどうですか」という質問をしたところ、ほとんどの学習者が他の人と意見を交換するのは役に立つと答えていたが、発話力の劣る数名の学習者は教師と一緒に学ぶ方が楽で役に立つ、と回答していた。学習者同士では間違った答を交換してしまうことがあるかもしれない、という回答もあった。意見を交換するというより、正解を求めている様子が少数ではあるがうかがえた。

2012年2学期では、回答した29名中3名を除き、役に立ったと答えていた。一人で読む方がいいと回答した学習者は「一人の方が集中できる」という理由をあげていた。役に立つと回答した理由としては、「同じ文章を読んだが、人によって考え方が違う。一緒に意見交換してよかった」「自分のわからないところを、他の人は分かっているので理解に役に立った」「わからない漢字、言葉を友だちに聞ける」「漢字の発音（読み方）を正確にするのに役に立つ」「話す練習ができた」という理由をあげていた。

教師としては、読み教材を中心に学習者が話し合いを通して、様々な解釈、その解釈に至る思考過程などを共有することでより豊かな思考経験を積んで欲しいと話し合いの時間を設けている。しかし、読みの力だけでなく、口頭表現能力、また他の学習者の意見を理解する聞く能力などの差異が話し合いの障害になっている場合があるのは認めないわけにはいかない。

使用した読み教材「ラナルド・マクドナルドと森山栄之助」、小説『海の祭礼』の抜粋

には、内容確認質問だけでなく、学習者に考えさせる質問項目が用意されている。書かれている事実確認と学習者の想像、思考を促す質問項目が並ぶよい質問リストだと考える。期末テストの最後の質問項目に、「ロナルド・マクドナルドと森山栄之助」、小説『海の祭礼』の抜粋を読んで考えたことを書きなさい、という設問をした。「質問リスト（上述の読み教材に付随している質問リストを指す）は役に立った。質問の答えを探しながら読んでいった。本当だ、これはどうしてだろう、と自分では気がつかないことがわかるようになった」とある学習者が書いていた。この学習者は、授業でのやりとり、内容理解ワークシートの完成度、試験結果などから優れた読み手であると著者は評価しているのだが、小グループでの話し合いに対しても「いろいろな人の意見が聞いてよかった。役に立った」と高い評価をしていた。

相互教授の研究には、優れた読み手のストラテジーが未熟な学習者に伝授され、直接教師から教えられるより読解水準が向上するという結果もあるようだ。そして、成績上位の学習者より、下位の学習者に有効だという報告もある。2012年1学期、2学期のアンケート結果からは、教材をよく読んで授業に臨む上位学習者の方が相互教授にいい評価を与え、授業への準備不足だったり、読む力の劣る学習者が否定的な評価をしているように見えた。この点においてのさらなる観察、考察、データ収集が必要であると考えられる。

12. メタ認知活動

本授業で教師が学習者に促したメタ認知活動とは、何がうまく行かないから理解が進まないのかを知ろうとする態度、わからないという事態に溺れることなく、何が困難を作り出しているのかを自分に問いかけてみる、というモニタリングである。その後、その困難を抜け出すためのストラテジーを使用することまでは要求していない。その段階は上述の相互教授で実現できれば理想的だと考えている。

学習者に少なくとも見えてほしいのは、背景知識と読み教材、テキストとの関係である。背景知識があって、初めて理解が可能になる箇所が「ロナルド・マクドナルドと森山栄之助」や小説『海の祭礼』の抜粋には多く見られる。未習の言葉や表現があるから理解が進まないだけでなく、背景知識が足りないために理解が進まないということにも気づいて欲しい。さらに、ある特定の単語や比喩表現などが背景知識を必要としているのではないかと推察する力、読みの経験を積むに従ってそのような勘を働かせることができるようになって欲しいと思っている。「血液型性格判断」では、新出語彙・表現が多い、または多すぎるなど読み物の特徴を客観的に評価できる、あるいは評価しようとする態度も養いたい。そこから理解への対策が考え出されるはずだからだ。

13. 今後の課題と展望

現時点での読むの授業では読み教材を配布し、読む目的を教師が指示し、読みの目的に応じた読み方を指導しているのだが、自立した読み手を育てるためには、読む目的を学習者自らに見出させる工夫を考えてもいいのではないだろうか。その具体化はまだ進んでいないが、環境作りの準備をしていきたいと思う。

本授業では、読んだことに関して話すだけでなく、様々な書く課題も与えている。(高橋 2011) 読み教材をクラスで共有することはある状況を共有することを意味する。つまり、書くことを課した場合、状況説明、心理説明、事実説明などで正解と不正解がはっきりするのである。誰が誰に何をしたのか、という事実を述べる際、受動態を使っても能動態を使っても事実は一つであるので、学習者の文法間違いを指摘することが容易である。自他動詞の使い分けや授受動詞の適切な使用など、このレベルの学習者はまだ不安定である。「させた」のか「された」のか「してもらったのか」「してしまった」のか学習者の間違いを状況と照らし合わせ指摘し、効率的に訂正することができる。試験の際の解答文の書き方指導の必要は前述の通りである。

語彙の拡充という面でもトットちゃんに出て来る「棒で穴を掘って入れた」という一節に「埋める」「掘り出す」という動詞は出てこないのであるが、一連の動作として動詞を補強することができる。心理描写にしても様々な心の動きを表す語彙・表現を教材に出て来る登場人物の行動、周辺の人々の反応などに合わせ導入することができる。様々な技能の統合が図れるのである。

筆者は、他の技能の授業との連携を図ることでより効率的かつ実用的な授業が可能になるのではないかと考える。ある読み教材の背景知識となるような事柄が、例えば聴解の授業で扱われ、作文の授業で読み教材の内容を引用しつつ、自分の意見、反対意見を述べるなどという課題を課す、などができるのではないだろうか。一つのテーマに関連する読解教材、聴解教材、作文課題などが準備できれば、語彙学習という一面に限っても、学習者は、新出語彙であっても、複数の授業で同様の語彙に接することになり、効率よく学び、使用する機会も増すことだろう。

14. おわりに

読むことは、読み終わると同時に理解が完結するというものではない。若い頃に読んだものを読み返してみても、年を重ね、経験を重ね、以前とは違う面が見えてきて、さらに理解が深まり、以前の理解がいかに浅かったかと気づくことがある。小説などの一節が、最初に読んだ時には知らなかった背景知識を後日得て「そういうことだったのか」と思考の回路がつながり、あらためて理解できたという経験をすることもあるだろう。あるいは、小説の主人公と同じような体験をして、より共感できたという経験もあるだろう。しかし、

授業においては、長い人生の中で理解することを凝縮して伝えなければならない。より効率的に読む経験をさせることが読む授業の設計である。それは読みの研究の成果を活用することにほかならない。その試みの一つが教材の読み物に関わる背景知識の収集活動である。効率的な文章理解には読み物と学習者の有する知識を関連付ける能力が必要だ。適切なスキーマを使うことで正確かつ、より深い理解が可能になる。今回は資料として、説明文「ラナルド・マクドナルドと森山栄之助」と小説『海の祭礼』の抜粋からの期末試験、トットちゃんの内容理解質問ワークシート、授業アンケートを使用した。今後、授業として成り立つ範囲で研究計画も立て、客観的資料を準備し、より実証的研究結果を提示していきたいと考える。

参考文献

- 池田重監修（1990）『中級からの日本語—読解中心—』株式会社新典社
- 石田敏子（1988）『日本語教授法』大修館書店
- 角田修平・野呂忠司（2001）『英語リーディングの認知メカニズム』くろしお出版
- 高橋純子（2011）「教材の特徴を生かした読みの活動—「読むJ641」授業報告—」『筑波大
学留学生センター日本語教育論集』27：183-193
- 天満美智子（1989）『英文読解のストラテジー』大修館書店
- 富岡純子・高岡サク（1992）『日本語中級読解』株式会社アルク
- 北條淳子（1982）「読むことの学習段階」『日本語教育事典』大修館書店
- 北條淳子（1990）「読解の指導」『日本語教育事典』大修館書店
- 三浦昭他（2001）『日本を知ろう 日本近代化に関わった人々』株式会社アルク
- 渡辺時夫（1996）『新しい読みの指導—目的を持ったリーディング』三省堂
- Alderson, J., et al. (1984) *Reading in a foreign language.*: Longman Group Limited
- Grellet, Françoise (1981) *Developing Reading Skills A practical guide to reading comprehension exercises*: Cambridge University Press
- Mackay, Ronald (1979) *Reading in a second language*: Newbury House Publishers
- Rivers, Wilga M. (1987) *Interactive language Teaching.*: Cambridge University Press

参考資料 1

内容理解ワークシート

名前 _____

「トットちゃん」を読んで次の質問に答えなさい。

1. トットちゃんは男の子でしょうか、女の子でしょうか。なぜそう思いましたか。
2. トットちゃんは何歳ぐらいでしょうか。なぜそう思いましたか。
3. このお話はいつ頃のことでしょうか。
() 100年くらい前 () 戦争(1945年)の前 () 戦争の後すぐ
() 30年くらい前 () 20年くらい前 () 10年くらい前
なぜそう思いましたか。
4. トットちゃんは、いつ、どこで、^{ひろ}何を拾いましたか。
5. トットちゃんは前にもそれを拾ったことがありましたか。それは^{かんたん}簡単でしたか。どうしてわかりますか。
6. 拾った後、トットちゃんはどうしなければいけないとっていましたか。
7. トットちゃんは「しなければいけないこと」をしましたか。どうしてですか。
8. トットちゃんは家に帰る前に何をしましたか。それはどうしてですか。
9. トットちゃんは次の日何をするつもりでしたか。
10. トットちゃんはなぜ「不思議!」と思ったのですか。
11. トットちゃんはなぜ「神様が見ていたのかな」と考えたのだと思いますか。
12. 五銭というお金は今のお金ではいくらぐらいだと思いますか。なぜそう考えましたか。
13. 「ロッキー」と言うのは何だと思いますか。なぜそう思いますか。
14. 「トモエ」と言うのは何だと思いますか。なぜそう思いますか。
15. 「トットちゃん」の文章の中のわからない表現、言葉を書き出してみましょう。

参考資料 2 (期末テスト抜粋)

1. 次の文章を読んで質問に答えなさい。

ロナルド・マクドナルドは、17歳の時に船員となり、ニューヨークからロンドンへ行き、雇われてサンフランシスコへ行ったが、① そこで乗り組んだ船は奴隷船であった。彼は幻滅して、次は捕鯨船に乗り組むことにした。

彼ら 12 名の通詞は、マクドナルドの置かれている寺で英語を習うことになった。彼らは毎日のように寺に通って英語を習ったが、それと同時にマクドナルドも日本語の単語を習い、ローマ字で紙に書いて、覚えるようにしていた。今までに日本語に興味を示した西洋人を見たことのない彼らは、②それを見てびっくりし、③彼に対して好意を持つようになった。英語の授業は単語の発音から始まり、それが済むと会話の練習に入った。翌 1849 年の 2 月ごろになると、彼らは簡単なことならば、マクドナルドも驚くほど、かなり自由に話せるようになった。一番上手だったのが、語学の才能のある森山だったことは、言うまでもない。

1) ロナルド・マクドナルドは、なぜ幻滅したのですか。

2. 次の文章を読んで質問に答えなさい。

森山は、自分の髪をつまみ、

「ワット？なに？」

と、たずねた。

マクドナルドは紙に Hair と書き、森山は、それを通詞たちにかざしてみせたが、マクドナルドの口からもれた発音に、ふたたび顔色を変えた。かれが信じていた発音はヘールであるのに、マクドナルドの口からは、ヘアーという言葉がもれている。かれは、自分の体が ①地の底に沈んでいくような絶望感にとらわれた。

森山は、額、眉、眼、鼻、口と指さして問うことをつづけた。

マクドナルドは、森山が口にする What? という言葉に②いぶかしそうな表情をしていたが、それが What? に相当する日本語であることに気づいたらしく、Brow の発音練習をすませた後、眉を指さし、

「ナニィ？」

と、たずねた。

森山は、マクドナルドが、日本語ではどのように言うか問うていると察し、

「めえげ」

と長崎言葉で答えた。マクドナルドはうなずき、Mege と書きとめた。

首、肩、胸、手、指、腰、足とうつついていったが、マクドナルドは、森山が指さす前に自分で足などをたたき、英語を口にするようになった。かれは、次第に教えることに熱中し、声も大きくなった。通詞たちの発音がおかしいとはおぼろしく手をふり、発音をくり返す。かれと通詞たちの間に熱っぽい空気がひろがった。

森山は、発音のほとんどが自分の考えていたものと相違していることに③呆然としながらも、④マクドナルドをあらためて見なおすような思いであった。驚くほど勘がよく、表情の動き、手振りで敏感に内容をつかむ。通詞たちに発音を反復させる彼の顔は潮潮し、教える才能をそなえていることが感じられた。

マクドナルドが、ふたたび頭からつぎつぎに下方の部分の指さしながら発音をくり返し、それが終わりに近づいたころ、近くの寺で鐘をつく音がし、遠く近くの鐘がかさなり合って聞こえてきた。

森山は、紙に Tomorrow と書いてマクドナルドにしめし、⑤明日また伝授を乞うことをつたえるため、「トモルロウ」

と言った。

マクドナルドは、紙に書かれた文字に眼をむけると、首をふり、⑥口をうごかした。森山は、やはりちがうのか、とうなずきながらツモロウと書きとめた。

マクドナルドは、片手をあげ、

「Tomorrow、ナニイ？」

とのぞきこむような眼をした。

アシタと答えた森山は、マクドナルドが Tomorrow — Asita と紙に記すのを見た。

1) ①地の底に沈んでいくような絶望感にとらわれた。とありますが、それはなぜですか。

(以下 略)